

なかに西洋的ロマンティズムを描破しようとしたのである。

鷗外は外山の言をしりぞけ、審美的仮感と実感との相異を美学的に説き、美の理論的根拠をハルトマンの審美学によって証明しようとしたのであった。

以後、二人の交遊は深まっていったが、明治

32年12月26日、原田は病（肺結核）を得て、不婦の客となってしまふ。

鷗外はその悲報を左遷の地九州小倉で聞き慟哭し、原田のために一文を草し、やがて遺作展開催のために奔走する鷗外の美しい友情にも言及した。

（平成21年9月例会）

## 書籍紹介

### 宮入慶之助記念誌編纂委員会 編

## 『住血吸虫症と宮入慶之助——ミヤイリガイ発見から90年——』

住血吸虫のライフサイクルを発見した宮入慶之助（1865–1946）の記念館（<http://www5.ocn.ne.jp/~miyairi/>）の開館（1999年）及び2004年の桂田富士郎（1867–1946）による日本住血吸虫発見100周年などを契機として、日本の住血吸虫症研究者らは、宮入の業績およびその後の研究動向、予防活動などについて検証作業の必要性を認識するに至った。寄生虫病学者はもちろん、医学史研究者、新聞記者などが本書に貢献している。

この本は第一部と第二部という構成にわかれているが、むしろ、「医学史」<sup>1)</sup>、「予防」<sup>2)</sup>、「住血吸虫症の学術」<sup>3)</sup>という三部構成の方が妥当である。なお、巻末には、宮入の著作リスト、年表、書簡、遺稿、アルバム、索引が含まれている。

ヨーロッパと日本に関して、住血吸虫症の歴史を比較する試みは参考になる。日本では地理的に限定されていたため、ほとんど農家を悩ませる疾病だったとってよい。所謂、「片山病」に関する論文は1847年に記録されている（住血吸虫症, 3.）。一方、ヨーロッパでは19世紀末から20世紀初頭にかけて、植民地で注目されてた疾病だった。住血吸虫症、あるいは *Bilharzia* は植民地病であり、寄生虫の生体及びライフサイクル、感染経路など、病因に関する知識が十分であったとは言

い難しい。しかし、植民地統治する側にとって、住血吸虫症は、多数の兵隊や官僚を襲う、熱帯病の中でも予防の対象に挙げられる疾病だった。エジプトは、世界の住血吸虫症の流行地方のなかでもトップの位置を占めており、1937年の調査によれば、人口の47%が感染していると予想された。すなわち、エジプトは住血吸虫症研究の中心地だった（*Bilharzia*, 10, 45, 54）。

1904（明治37）年5月26日、岡山医科大学の桂田富士郎教授が猫の解剖を行い、肝臓に寄生虫を発見した。同年の5月30日に京都帝国大学医学部の藤浪鑑教授（1870–1934）が、片山病で死亡した男性の解剖を行い、寄生虫を発見した。桂田はこの虫を1851年にエジプトで Theodor Bilharz（1825–1862）が発見した *Bilharzia haematobia* と比較し、*Schistosomum japonicum* の名を付けた（住血吸虫症, 6 ; *Bilharzia*, 14）。1913（大正2）年には、宮入が片山病の流行地方で貝に着目した。住血吸虫の卵を感染させ、その貝の中に住血吸虫の卵が *cerariae* を生み出し、この *cerariae* が動物及び人間を宿主として侵略する事、いわゆる中間宿主のライフサイクルを確認したのである（住血吸虫症, 17）。1915（大正4）年に、住血吸虫症研究者の Robert Leiper（1881–1969）が日本での業績を認め

ており、エジプトで同様の実験を行い、宮入の発見を追認した。西洋研究者の確認の後：“Bilharzia became a parasitic disease carried by a snail; thus the fellaheen (百姓) could be safely ignored and allowed to continue in their time-hallowed ways. With the discovery of intermediate hosts, control seemed possible without any corresponding social action.” (Bilharzia, 70)

住血吸虫のライフサイクルが発見された後、研究は、病理学、生物学、免疫学、生化学、臨床、予防などの各方面において着実に進められた。一般的な予防は、予防に関する教育キャンペーン、宮入貝生息溝渠のコンクリート化などに代表される。広島県では、1918(大正7)年に広島県地方病撲滅組合が設立され、藤浪の提唱により、生石炭が殺菌剤として使用された。1926(昭和元)年には、昭和天皇が広島に行幸し、撲滅活動について情報を得ている。1947(昭和22)年に、再度広島に行幸した際、片山病の動向を下問している。戦後、県中心の活動は、一次的に無秩序な状態となり、県は1948(昭和23)年に生石炭使用を廃止、石炭窒素に変更した。翌年、新たに片山病予防研究所が設立されている。昭和天皇の関心が、予防及び撲滅キャンペーンへと結びついた側面がある(住血吸虫症, 25-26)。1950年から宮入貝生息溝渠のコンクリート化が宮入貝の減少を促進し、1988年に旧片山周辺が住血吸虫症無病地と布告されるに至った(住血吸虫症, 23.)。山梨県では、1917年から採取法により、宮入貝1合あたり50銭が支払われた。さらに、公衆衛生官が1924年から生石炭を使用開始、県知事が1928年に国庫補助申請書を提出した。

以上のように、住血吸虫症への関心が高まりつつあったなかで、国会では1931年に寄生虫予防法が成立した。いわば、地方病は国家的な課題となったのである。戦後、GHQが住血吸虫症の予防を援助し、宮入貝生息溝渠のコンクリート化を促進した(住血吸虫症, 33.)。

医学史の面からみると、この本は古典的な部類に属する。勝利の物語として、医学の避けられない進歩を礼賛するものである。たとえば、石井明

の次の文章は象徴的である。「したがって日本が日本住血吸虫症を制圧したことは誇るべき先駆的で歴史的な事実となった。これには日本の研究が大きな役割を果たしたことを記念しなければならない。研究論文は莫大な数に上っている。日本語で書かれたものが多いので必ずしも世界に十分に知られているとは言えないが、それらの成果がもたらした結果が日本住血吸虫症の制圧に至ったことを明記する必要がある。」(住血吸虫症, 9.) このような古典的な叙述ではなく、今後は、寄生虫の研究及び予防の社会史が必要とされている。葉袋勝が、小学生を対象とした『僕は地方病の博士だ』(山梨県地方病研究部, 1917年)を紹介しているが、さらに社会レベルの歴史を掘り下げる必要がある。たとえば、衛生官がどのように住血吸虫および住血吸虫症の知識を民間に教えたのか、衛生官と地方の地元の人々の交流はどのようなものであったのかという点は、必須の課題といえるだろう。

医学史の研究者のJohn Farleyにより、“In 1913, Keinosuke Miyairi and his assistant Masatsuga Suzuki made all the important breakthroughs. They discovered that in their area of Japan miracidia penetrated local snails, developed into sporocysts in the tissues of the snail, and eventually liberated free-swimming cercariae. For the first time these schistosome cercariae were seen and described.” (Bilharzia, 67) 欧米の医学史界では、住血吸虫症の歴史はヨーロッパ中心の傾向にある。FarleyのBilharziaに比べたら、住血吸虫症と宮入慶之助の貢献は、アジア中心の物語ということになる。これからの歴史的な研究には、多くの課題が残されている。まず、日本の住血吸虫症研究は、熱帯病研究および帝国医学との繋がりはどのようなものだったのか。戦前と戦後の予防活動の継続性及び変化をどのように考えるべきなのか。1931年の寄生虫予防法の設立にかんする、ミクロスタディはぜひとも望まれるところである。戦前の公衆衛生法の設立については、さまざまな利害が対立するプロセスがあった。寄生虫病予防にかんしては、どのような背景のもとで、それが国家的な問題になったかを考える必要がある。

最後に一つ、見過ごすことのできない、情報の欠落がある。本書では図表が多用されて科学的データがさかんに紹介されているにもかかわらず、住血吸虫のライフサイクルの図が存在しない。たとえば、米国 CDC は、web 上でこの情報を提供している。参照されたい。www.dpd.cdc.gov/dpdx/HTML/ImageLibrary/SZ/Schistosomiasis/body\_Schistosomiasis\_il10.htm

## 参考文献

John Farley, *Bilharzia: A History of Imperial Tropical Medicine* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003).

Iijima Wataru, “‘Farewell to the God of Plague’: Anti-Shistosoma japonicum Campaign in China and Japanese Colonial Medicine,” *The Memoirs of the Toyo Bunko* 66 (2008): 45–79.

## 注

- 1) 石井明, “日本における住血吸虫研究の流れ”; 田中寛, “宮入慶之助と中間宿主カイ発見”; 辻守康, “片山記から片山病の防圧まで”; 多田功, “九州大学にお

ける宮入慶之助”; 小林照幸, “住血吸虫研究史における人間ドラマ 取材雑感から”; 清永孝, “慶之助とホタルと左京”; 宮入源太郎, “人間・宮入慶之助”; 宮入健三, “宮入慶之助記念館の開館”

- 2) 葉袋勝, “山梨県の住血吸虫の防圧”; 塘普, “筑後川の住血吸虫防圧”; 青木謙二, “ケニアに住血吸虫症と防圧”; 安高雄治及びその他の者, “住血吸虫症と感染行動”; 太田伸生, “中国における住血吸虫症”; 松田肇・桐木雅史, “メコン住血吸虫症”; 林正高, “フィリピンの日本住血吸虫症・脳症型, 肝脾臓腫型の臨床と同症に対する挑戦”; 梶原徳明・阪幸男, “中間宿主ミヤイリガイの殺具による日本住血吸虫症の制圧”; 二瓶直子, “GPS で住血吸虫症流行を追う”

- 3) 中島敏郎・平田瑞城, “日本住血吸虫症の病理形態学”; 大橋眞, “住血吸虫に対する生体の防御機構”; 小島荘明, “住血吸虫症のワクチン”; 平山謙二, “住血吸虫感染と体質”; 岩水襄, “ミヤイリガイの生物学”

(Alexander Bay)

[九州大学出版会, 〒812-0053 福岡県福岡市東区箱崎7-1-146, TEL. 092 (641) 0515, 2005年12月, B5判, 277頁, 5,500円+税]

## 小泉和子 編著

# 『家で病気を治した時代——昭和の家庭看護——』

医療を利用する側の立場の国民一般、それも家族の健康を守る役割にある主婦の視座からみた家庭看護の歴史書が著された。家庭看護がもっとも発達した時代として「昭和戦前期」を取り上げている。明治32年の高等女学校令の制定により、女子に国家が求めたのは良妻賢母の理念であり、女子にとっては中等教育でありながら高等女学校と命名された。この女学校の教育の中に家政学があり、そこには育児や養老、家族のなかの病人の看護が主婦の役割とされ、その方法が教授され、教科書にもこれらの項目が掲載されている。

看護には二通りの意味がある。すなわち、家庭看護と専門職看護である。前者は一般人が行い、後者は資格を有する看護職が担当する。このふたつの流れは近代以後、相互に影響しあい、現在においても構造的には変わらない。

本書の編集者で著者の小泉和子氏は、日本家具、室内意匠、生活道具史が専門で、工学博士、生活史研究所を主宰され、東京の中央区で「昭和のくらし博物館」という私設博物館（1999年設立）を運営されている。ここで年に1度企画展を開催し、第1回のテーマは「家庭看護」第5回「町のお医者さん」第7回が「家で病気を治した時代」で、本書は第7回の企画をもとに、医療に関する前述の2つを加えた内容となっている。

昭和戦前期はもっとも家庭看護の発達した時代だった。氷枕、氷嚢、体温計、吸入器、浣腸器は多くの家庭にあった。切り傷にドクダミ、腫れ物にツブブキ、民間療法の知識も豊富だった。ひとたび家族のだれかが病気になれば、家族が力を合わせて看病し、病気と闘った。産婆も町医者も按摩も鍼灸師もそれを助けた。家のなかで人の生死